

その言葉を聞いても、那珂姫はすぐには信じられなかった。息子である二の宮にびったりと寄り添ってきた桜女御は、おいそれと実家にも帰ってこない人だったからだ。帝の妻となり帝の御子を産めば、女性はそれまでのような暮らしはできなくなる。神聖な存在である帝とその御子たちはめったなことでは宮中を出ないからだ。

その大事なわが子を置いて一人で寺に静養に行く？ しかも未婚の若い妹にわが子をたくして？

だが、考えようによってはそこまで姉は疲れ、追い詰められているということだ。宮中の女性日々注目されつづける。食が細れば病にかかったかただのわがままかと勘ぐられ、おいしい物をおいしいと言えば食い意地の張った女よとささやかれる。静かにしていれば無口だ陰気だ、面白い話を立てて笑えばはしたない……。

ふつうの女性なら気を病んで当たり前だ。しかも桜女御は今、母から離れたがっている二の宮に悩んでいる。

「わかりました。姉上、どうぞごゆっくりなさってください。二の宮は、私もえぎがお世話いたします」

というわけで、主のいない御殿はのどかになった。

那珂姫の父親の政敵の息子——長ったらしいがこの説明が一番正しい——である明雅が訪ねてきたのは、遠く見える北山が雨雲にかすむ、そんなある朝のことだった。

訪問者は、貴族の姫にすぐには会えない。めんどうだが、

やってきたらまず声を出して自分の存在を室内に知らせ、出てきた女房に取次を頼まなければならぬ。

「那珂姫に、明雅がお話したいと伝えてくれ」

そのうえ、ふつうの姫君なら出てきてもくれない。自分の返事も女房に取り次がせ、最初から最後まで自室の奥に根が生えたように動かないでいるのが上品とされている。

ただし、那珂姫はまどろっこしいことが大嫌いだ。だから明雅がやってきたことが告げられると、寝起きの目をこすりながらも、明雅の近くまでやってきた。応対をしたのがもえぎだったおかげで大目に見てもらえて助かった。互いに子どもだったころは遊びまわっていた仲だから遠慮も礼儀もすつとばしてしまふ。明雅なら大歓迎だ。鶴大臣の息子と桜大臣（さくらのおおとら）の娘が親しく話していたらまたまたうわさにはなるだろうが、言いたい者には言わせておけばいい。

ところが、明雅はいつになくまじめな顔だった。

「あの、たいしたことではない……いや、おれとしてはたしいたことで、でもそんなにかまえて聞いてもらえなくてもいいんだが、つまりその……尚侍（なごうじ）から手紙をもらった」

「まあ」

那珂姫は一瞬にして眠気が覚めた。

尚侍は、那珂姫の親友だ。宮中で働く女官の総まとめをしている、才色兼備の女性。自慢の友人だ。

ところが、那珂姫が宮中に来てまもなく、尚侍は宮中か